

國學院大學神道文化学部 令和5年度学外研修
「鎮守の杜とこれからの共生社会を学ぶ」
参加学生レポート集

令和6年3月26日
國學院大學神道文化学部

目次

学外研修「鎮守の杜とこれからの共生社会を学ぶ」実施報告	1
参加学生から寄せられたレポート	3

学外研修「鎮守の杜とこれからの共生社会を学ぶ」実施報告

今日、日本の地域社会は、少子高齢化・人口減少や頻発する災害に直面し、その持続可能性が課題となっています。その中で、地域づくりの担い手を育て、環境保全や災害対応の拠点ともなりうる存在として、神社、鎮守の杜の役割がつとに注目されており、現代社会に即応した取り組みもさまざまになされています。

神道文化学部ではこのたび、そうした取り組みを進めている団体のひとつである、「一般社団法人 第二のふるさと創生協会」に協力を仰ぎ、神道文化を学ぶ学生たちが、自然と共生する森づくりの現場でのフィールドワークを体験することを通じて、自らの将来像を描くための手がかりを得る機会を提供することとしました。

令和5年10月21日（土）午前8時に、10名の参加学生と2名の引率教員（黒崎浩行学部長と松本久史副学部長）が渋谷キャンパスに集合し、バスに乗って千葉県君津市の内山緑地建設「きみつのさんぽ道」を目指しました。

到着後、第二のふるさと創生協会事務局長の高橋知明氏と、林学博士で「里山ゼロベース」というプロジェクトを提案している西野文貴氏と合流し、午前中は座学でお二人の講義を聴きました。

昼食を済ませた後、西野氏の案内で植物観察を行いました。森を歩きながら、神社にゆかりのある植物を観察し、解説をうかがいました。



その後、圃場へ移動して、「鉢上げ」という作業を体験しました。今年7月に宮城県の神社で採集されたスダジイの実がバットの中で発芽していて、これを1本1本、ビニール製のポット（鉢）に植え替える作業です。この苗は、1年から1年半後に植樹ができるまでに育つとうかがいました。



最後に、君津市清和市場に鎮座する諏訪神社に参拝し、石井昭平宮司から講話をいただきました。8月26・27日に行われる例大祭、12月5日に行われる「ししきり祭（御狩祭）」について資料をまじえて説明していただき、令和元年台風19号による被害と復旧、少子高齢化・人口減少の中での神社の維持や地域の伝統文化継承のご努力を学びました。



この研修で一人一人が体験し、学んだことを形に残し、次へつなげるために、参加者によるレポート集を作成しているところです。神道文化学部では今後もこのような研修を継続し、発展させていく方針です。

（國學院大學ホームページ、令和5年11月14日掲載）

参加学生から寄せられたリポート

田谷恵太（神道文化学部4年）

今回、もともとは参加予定がなかったのだが、同じゼミの学友からお誘いを受けたことに加え、実施数日前であるにもかかわらず黒崎先生が快く参加を引き受けてくださったため、研修に参加することとなった。きみつのさんぽ道内の施設をお借りして、午前は座学、午後はフィールドワークを行い、そこから同市内の諏訪神社にて宮司さんのお話をお伺いすることができた。

午前中、まず一般社団法人第二のふるさと創生協会事務局長である高橋さんから、災害時における神社の木、すなわち鎮守の杜の重要性についての講義を受けた。鎮守の杜というのは古くからその地域に根付いている木々であり、後々植樹した木や人口の防波堤よりも防災面で実際に人々を守った例を、スライドとともに紹介していただき、実家の神社の状況を今一度見直すきっかけを得ることができた。

その後、林学博士の西野さんからは、鎮守の杜の木々の構成や森づくりについての講義を受けた。午後のフィールドワークで実際に木々の生態に触れ、もともとあったわずかな知識と混ざりあってより理解が深まった気がした。

そして、諏訪神社では、台風の被害を受けた際の被害状況や周囲の協力体制、また、境内の木が数本倒れてしまったというお話を聞いた。事前の座学で得た知識により、この神社に植わっている木が比較的倒れやすいことを理解していたので心配であったが、どうやらきれいに建物をそれて倒れたらしい。また、木々の関係でいえば、諏訪神社では切り倒した木を乾かして保存していたことにより、災害時に役に立ったそうだ。丁度実家神社には同じような木があるため、真似できそうだなと感じた。それでも少なからず被害はあったようで、拝殿の網戸や雨戸が外れたり、大太鼓の革部分に木が刺さり使えなくなったりと、小規模神社にとってはかなり厳しいものだったそうだ。それでも、研修で訪れた際のようにきれいに復旧されているのは、地域との交流が深く、神社の重要性を理解してもらえていたからだろう。

実は、諏訪神社を訪れるまで、直接宮司さんにお話をお伺いするということはしたことがなく、又聞きが主な情報入手手段だった。そのため、私に話してくれた人にとっては小規模神社であっても、職員さんを雇うほどの余裕があったり地域人口が2桁万人あったりと、認識の差からうまく自分の中に落とし込めないでいた。今回、間に第三者を挟むことなくお話を伺えたことは、自分にとっては良い経験になったと思うし、普段聞くことはできないであろう小規模神社ならではの宮司さんの本音というのは、同じく小規模である実家の神社とも照らし合わせることで、大変有意義な時間であった。可能であればもっとお話をしてみたかったのだが、バスの都合もあり、少しだけ個人的なお話をするにとどまった。もし今後似たような機会があれば、ぜひ参加してみたい。

野口雄五（神道文化学部 4 年）

私が今回の学外研修で学んだことは、神社の鎮守の森の素晴らしさとその可能性である。西野博士からは、林学の面から神社の鎮守の森について解説をしていただいた。コンクリートで作った防潮堤では、地中に打ち込まれた柱によって栄養が豊富な地下水脈が遮断され、海が枯れていってしまうとともに、人工物である以上、コンクリートの防潮堤は完成されたときがピークであり、その後は滅びへ向かっていってしまうという。それに対して、「森の防潮堤」は、自然環境と調和し、完成時から生育へ向かっていき、さらに循環していくことができる。特に、神社の「鎮守の森」は、地域に適合した在来種の木、いわゆる「ふるさとの木」で構成されるため丈夫であると同時に、高木・亜高木・低木・草本の 4 層が揃った「極相林」という貴重な森であることが多く、特に災害に強いという。実際、災害時に多くの木々が倒れたり、海水に浸って枯れてしまったときにも、鎮守の森だけは残ったという例は多く、かの東日本大震災の時にも、津波の被害を免れた範囲のキワに、神社が点在していたと知った時には非常に驚いた。防災から見た時に、鎮守の森は非常に強く、我々を守ってくれるものであり、これを「森の防潮堤」として全国へ植樹して広げていくことは、非常に素晴らしいことだと考えた。午後のフィールドワークでは、実際に様々な植物を観察しながら博士より詳細な解説をいただいたが、植物ごとにそれぞれ全く違う特徴があることがわかり、鎮守の森の植物たちの多様さを改めて実感することとなった。

そして、高橋先生からは、信仰の面から鎮守の森について解説をいただいた。西野博士から教えていただいたように、鎮守の森の強みは、高木から草本まで様々な木々が共存していることにある。高橋先生は、このような鎮守の森のあり方を、古代の人々は見て学び、人間生活のお手本にしていたのではないかと仰られた。私は、これに深く感銘を受けた。そのような神社の鎮守の森のあり方こそ、八百万の神々が共生する神道の信仰を作り出したのではないかと考えた。

私は、このように今回の研修で学んだことを、今後の人生に生かしていきたいと考えている。私は、伊勢神宮の研究をライフワークとしており、伊勢神宮崇敬会にも入会しているが、神宮では、中世に枯れてしまった宮域林の御杣山に植樹を行い、森の復興を目指す事業が進められている。我々崇敬会員も、年に数回、御杣山の植樹をお手伝いさせていただく機会があるが、このように神社の「鎮守の森」のありがたみや重要性を認識した後であると、より一層自然への感謝の念がこもり、このような植樹活動にも身を引き締めて参加することが出来るようになって感じた。そして神宮のみならず、神社・神社以外を問わず、様々な植樹に参加していきたいという思いが強まった。

研修への意見として、告知が K-SMAPY 上だけであったので、見逃してしまった人もいたのではないかと考えた。メールアドレス宛にも告知が送信されると、より多くの人の目に入るのではないかと。また、次回以降はぜひ大学院生も参加できるようにしていただけると嬉しい。

都甲仁（神道文化学部 4 年）

1. 参加の動機

将来お守りしたい神社があるが、その神社は、過疎化地域にあり、あと 10 年もすると氏子がいなくなり、消滅の危機にある。

神職として奉職した際に、将来の存続に向け、どのようなことをして行けばよいのか、その参考となるヒントがあるのではないかと思い、参加を希望した。

2. この研修で何を見聞きしたか

大きく分けて 4 つの項目があり、それぞれ以下に見聞きした点を記す。

(1) 高橋知明氏（一般社団法人第二のふるさと創生協会事務局）のお話

1) 神社仏閣への祭礼行事へのお手伝い活動（「全国お祭りお手伝い隊」派遣）

これから 20 年すると、全国 8 万社の約 4 割が過疎化等の影響で消滅の危機にある。

そうした中、祭礼行事などに手伝いを必要としている神社仏閣などに隊員を派遣することを行っている。隊員は祭礼行事などの一員として奉仕し、地元住民と交流することで、その地への愛着と地元住民との間に絆が生まれる契機となり、また、地域においては「関係人口」を増加させる契機になる可能性がある。

人の交流を生まなければ、神社は守れない。神職同士のネットワークで派遣されるとすぐに溶け込める等、東日本大震災で活動した神職としての自らの経験談も交えながらお話しいただいた。

2) 鎮守の杜をモデルとしての森づくり（SDGs の森づくり）活動

東北大震災時に、松林は津波で流されたが、鎮守の杜は残ったことにも示されたように、鎮守の杜には、防災効果があることがわかったが、このような事例を踏まえ、「鎮守の杜をモデルとした森づくり」のための植樹活動を行っている。

植樹を行うに際しては、植樹から約 30 年で極相林を造りだすことのできる植樹技術を使い、効率的な推進を行っている。

3) SDGs を学ぶ教室開催事業

SDGs に貢献できる活動を推進するための啓発活動を行っている。

(2) 西野文貴氏（林学博士、里山 ZERO BASE 代表、株式会社グリーンエルム 代表取締役社長）のお話

前記の話を受け、鎮守の杜づくりで使われている植樹の技術等についてご説明された。

1) 植樹技術として採用している宮脇方式についての説明

明治神宮の森づくり（本多静六博士の計画に基づく）は、150 年計画で、極相林を目指したが、実際には、100 年で達成された。これは、自然界では、300 年かかるところを 100 年で達成したことになり、大幅な短縮だが、宮脇方式は、それを更に短縮し、30 年で極相林ができる。

宮脇方式は、宮脇昭先生（横国大名誉教授）が考えられた方式で、2～3年の苗木づくりからはじめ、それを混植・密植することにより、木自体の競争力を活かして生育することにより極相林まで到達する時間を短縮できる。

2) 日本の山林の課題

(i) 課題の背景

戦後復興等の理由から、1950年頃、木材需要急増に対応するため、国は「拡大造林計画」を進めた結果、スギ・ヒノキの森林が急増。しかし、その後、1970年には安価な外国材の輸入もあり、日本の林業経営が困難となり里山林が経済的価値を失い、山林放置、もしくは、赤字を国の補助金でなんとか回避している状況となっている。

（現時点で、前記の結果、日本の国土の7割を占める森林の内、その63%が人工林、37%が自然林という状態になっている）

(ii) 課題：放置されたスギ・ヒノキの単植林による以下の課題が発生。

①表層崩壊（土砂崩れ）、②生物多様性の低下、③水を貯える機能低下、④スギ花粉症者の増加、の原因となっている。

(iii) 課題解決のための方策

まずは、荒れた山林を人と自然が共存共栄するための里山と、人の管理を必要としない自然度の高い奥山へ整備することが必要。

3) 課題解決のための活動：新しい形の林業として、森林業を提唱し、活動を行っている。

国内、海外での事例紹介の中で、特に、日本において自然林が多く残されている場所として「鎮守の森」があり、これを保護・再生し、後世に残すための取り組みを行っていることが挙げられた。

(3) フィールドワーク

1) 植物観察：以下の植物（約20種）を実際の木・草の前でご説明いただいた。

イチョウ、ケヤキ、金木犀・銀木犀、スギ、マテバ椎、タラヨウ（葉書の木）、非榊、（真）榊、椋木、ヒノキ、クロモジ、ムカゴ、ヤツデ、三つ葉、スダ椎、タラ、楠木

2) 鉢上げ作業体験

発芽後、ある程度まで成長した苗を鉢に移す作業を体験…鉢植え後の木を1つ頂いたので、大事に育てていきたい。

(4) 諏訪神社参拝

参拝後、宮司から、神社の由緒・神社の現状（神社経営等）等の貴重なお話を聞くことが出来た。

3. そこから何を学んだか

(1) 神社と社会・人との関わり、神社の置かれている厳しい現状とそれを打開するために行われている活動等、神社をとりまく様々な事象について、その一端を肌で感じる事が出来た。

(2) 森林の果たす役割の大切さ、その中での鎮守の杜の位置づけの重要性を理解することが出来た。また、フィールドワークにより、普段接することが少ない、植物に触れ、また、個々の植物の名前を知ることが出来た。また、鉢植えの実体験をすることが出来た（土に直に触れることが出来た）。

4. この経験を今後どう活かすか

将来、神職として奉職した際に、神社の存続に向け、今回のお話しを参考とさせていただき、また、祭りの支援を仰ぐ等、具体的に活動に活かしていきたい。

5. この研修への意見・疑問

学外でのフィールドワーク等を通して、貴重な体験をすることが出来、大変有意義であったと思う。

今後も継続されることを希望する。

早尾恵理子（神道文化学部3年）

1. はじめに

秋めいて間もない秋晴の頃、神道文化学部の初の試みとなる学外研修が実施された。

記念すべき第一弾ということで、晴天に恵まれた私たち一行は、秋風に悠久の時の誘いを受け、千葉県君津市の「きみつのさんぽ道」へと向かったのである。

森のナビゲーターをして下さったのは、林学博士でもある西野文貴氏だ。ヨルダンで植樹のプロジェクトを進めるなど、多岐に渡り活躍されている。神職資格もお持ちであり、「里山ゼロベース」活動にて豊かな生態系を残す鎮守の森の可能性にいち早くフォーカスされている。

そして、一般社団法人第二のふるさと創生協会を運営し、全国で祭りや植樹のプロジェクトを手掛けていらっしゃる高橋知明氏だ。東京都世田谷区に鎮座する瀬田玉川神社に奉仕される傍ら、神社と人を繋げる活動をされてこられ、神職として正に鎮守の杜について精通、その未来を見据えて動かれている先駆者となられる方である。

植樹のプロであるお二人を交え、大切に守り、育まれてきた鎮守の杜の生態系の秘めたる謎とその可能性について考えた。

尚、私が参加しようと思ったきっかけは研究室の指導教授である藤本頼生先生のご助言にある。研究テーマが「旧郷社・旧村社の防災拠点としての可能性」である点を鑑み、本研修を通し、神社の豊かな鎮守の森は、防災という視点で考えたとき、どういった多角的な側面を見出すことが出来るのかについて考えるきっかけとするようにとの事だった。

実際に見て・聞いて・自分の足で体験することで見える鎮守の森が、「防災」という視点から可能性を紐解くきっかけとなったと振り返る。

2. 東日本大震災を振り返り

日本が体験した未曾有の災害として直近で記憶に残るのは東日本大震災であろう。

震災時を振り返り、高橋氏が話して下さった事に復興の過程にある国の施策と地元住民のニーズの齟齬が印象的であった。

一例としては、沿岸部に設置した防潮堤設置に伴う嵩上げ工事がある。

国は大きな復興予算を使い、大きな仕事をしたのだが、これがいけなかったのだ。予算が大きいせいで、巨額の資金が動く大規模な工事しか行えず、しかしそれは地元の漁師の人々が大切にしていた地下水脈を塞いでしまう事に繋がった。当然、ミネラルが多くプランクトンが豊富である漁場は磯焼けを起こし、使用できなくなった。こうした人々の声を届けなければ、本当の復興は成し得ていかないのではないだろうか。

そこで高橋さんは神社が持つネットワーク力に着目された。一枚岩として機能できる神社の強みを活かし、被災地の声を届ける活動に注力されている。

そして、そこで新たに見えてきたことの一つに鎮守の杜の機能があるという。

災害時に津波に多くのもものが流され、残る木がない中、逆に残った木というものはどういうものであったかという、それは「鎮守の杜」であったそうだ。

そこから40万本の木を植え、植樹活動を行い、「グリーンベルト」の構築を沿岸部一帯に設ける活動をされた。

この活動の原動力となっているのは、何か、お話を伺う中で見えてきたものは、「使命感」であり、「責任感」だと仰る。

震災時、多くの人々が寺社などの宗教施設に避難された。郷社・村社が多くを占める中、避難してきた方々の人数たるや、その数、実に400名に昇る。

想像するだけで大変さを感じられる。400名もの人々が避難してくることを想像すると、とても神社の設備だけでは十分でない。しかし、それが現状であった。

人々の意識の中に、神様の近くに身を寄せる意識があったのかもしれない。また、馴染みの町の神社であれば、避難所に行くよりも早く到着できる場合がある。そして立地条件も高台にあることが多いことも挙げられる。事実、震災時には3ヶ月避難所として機能していた神社が多数あるのだ。

3. 鎮守の杜の可能性に思いを寄せて

前述したように、鎮守の杜に防災機能があることをさらに詳しく教えていただいた。

林学博士でもある西野氏によると、鎮守の杜の特徴としては、木を切っておらず、本当の自然が残っている点にあるという。詳しく書くと、ミルフィーユのように高木、亜高木、低木、草本という4層が揃っており、人が植えたものではなく、生物多様性が保たれている事がポイントとなる。

また、針葉樹はオシャレな外観が魅力で、よく植えられるのだが、これは根っこが浅く、しならない為、倒れやすいそうだ。替わって、神社によく見られる広葉樹はしなる事で風を

受けても対応でき、倒れにくいという特徴がある。

この特性を活かして、森の防潮堤を作る事には意味があると述べられる。

西野氏曰く、人が作ったものは悉く壊れてしまうそうだ。ブロック塀や防潮堤がそうであろう。しかし植物は300年生きるという。300年生きる中には災害を多く経験してきている。言い換えると「植物にとって災害は、織り込み済みである」というのだ。この視点には、目から鱗であった。

鎮守の杜には、古代から人が培ってきた自然との共生のバランスがある。人々は鎮守の杜に学び、共に生きてきた。その道を追求する手がかりがあるという。

山の在り方、植物のあり方を見直し、神道の心が生きる鎮守の杜をお手本に、日本の未来に明るい希望の光を灯すことができるのではないだろうか。

4. まとめ

今回は「鎮守の杜とこれからの共生社会を学ぶ」を通じて、実際の取り組みについて学び、そして実際に森を、木々を観察しながら学ぶことができた。

これらの経験をもとに自分が暮らす地域で、実際に検証・実施すること、実家の神社でどう取り組むのかに発展させて考えていきたい。

「鎮守の杜」が日本の自然共生を学ぶ最後の砦、「クライマックスフォレスト」として位置付けされている事に使命感を持ちながら、今後も学び、考察を深めていきたいと考える。

神社界にとってもこれほど誇らしいことはない。この取り組みが未来の日本の災害危機を救うことは間違いない。

しかし、まだ始まったばかりであること、この声を大きくしていく必要がある点は見過ごすことのできない視点である。

西野氏は企業のCSR事業と連携して、植樹プロジェクトを推進していらっしやった。

可能性を広げて活動されている点に深く感銘を受ける。まだ、出来ることはたくさんある。

さて、利他主義は宗教者が持つ共通の感情ではないだろうか。

災害時には300、400名といた住人の方々が一斉に避難してくることも、東日本大震災を振り返ると想定される。そういった際に、受け入れないという選択肢は果たしてできるのだろうか。

宗教施設は防災拠点となることを望まれている。

日頃の祈りの施設から、防災時の拠点となるべく、神社はその機能を再発掘されるのではないだろうか。

祈りだけが宗教ではなく、人々に寄り添うことがその本質であると考えます。

「信頼」、「規範」、「人と人との相互性」がソーシャルキャピタルと言われるものである。

神社はこれから、貴重な社会関係資本となると考える。そのキーポイントとなるのが「鎮守の杜」であることが今回わかった。

今後は更に色々な角度から旧郷社・旧村社の災害時防災拠点の可能性について考察を重

ねていきたいと思う。

岩崎峻也（神道文化学部3年）

今回神道文化学部学外研修である「鎮守の杜とこれからの共生社会を学ぶ」に参加させていただき、非常に多くのことを学ぶことができた。まず私が参加した動機であるがそれは神社で働くに当たって必ず接することとなる鎮守の杜について興味を持っていたためである。恥ずかしながら本研修に参加する前の私は鎮守の杜についてあまり良いイメージを持っていなかった。理由は単純なことであるが掃除が大変であり、カラスや虫の発生原因となっていると考えたためである。しかし本研修によって多くのことを学んだことによってこのような鎮守の杜への悪いイメージは一掃されることとなった。

今回の研修にて個人的に一番大きな学びを得ることができた機会は高橋先生、西野先生によるお話であった。まず高橋先生のお話であるが内容としては「東日本大震災と神社」にまつわるものであった。高橋先生は東日本大震災当時、神社本庁に勤めており被害にあった神社と最前線でやり取りを行い、被災地支援を行っていた人物であった。そんな高橋先生のお話の中で私が大切だと感じた点は神社のネットワークについてであった。神社のネットワークというものは神社が日本全国に多く散らばっていることからわかるように非常に広範囲に及ぶ、しかし他の広範囲に及ぶネットワークとことなる点は神社のネットワークは非常に距離が近いということである。このような近いネットワークが形成された理由として神道系大学の存在が挙げられるのではないだろうかとは私は考える。全国の神職の多くは神道系大学出身者であり、同じ釜の飯を食った仲間意識のようなものが生まれる。この仲間意識こそが神社ネットワークの根幹にあり、相互協力体制が生まれているのではないだろうか。

続いて西野先生のお話であるが主題としては「鎮守の杜について」というものであった。この主題のお話の中で私が注目したテーマは「鎮守の杜と防災」についてである。このテーマを聞いて私が最初に思い浮かべた内容は森による土砂災害の軽減や防潮堤についてであったが西野先生のお話では一筋縄では森はこのような機能を持つことができないということを知ることができた。森と言っても鎮守の杜のように非常に強い森がある一方、高田松原のような強いとはいえないような森も存在する。それではなぜこのような違いが生まれるのであろうか。それは日本に適した木つまりふるさとの木で極相林が形成なされているかという点が挙げられる。鎮守の杜と呼ばれる森はまさにこのような極相林で形成なされており、津波や火災にも耐えうる力を有しているのである。

以上のようなこと以外にも本研修では非常に多くのことを学ぶことができた。この学びを活かし、神社ネットワークへの積極的な参加や、鎮守の杜の正しい知識の地域への普及を今後行っていくことが、今回研修に参加させていただいたことへの恩返しとなっていくのではないだろうか。また世界が戦争などで不安定な現代こそ神社界も鎮守の杜の極相林のように強固に固まっていかなければならないと考えた。

藏重命友（神道文化学部 3 年）

私の小学校時代の校歌には、「鎮守の森の濃みどりにかざす誠の旗じるし」¹という歌詞があったのですが、小学生時代の自分には、この歌詞の意味については理解することができていませんでした。そして今回、鎮守の杜とこれからの共生社会を学ぶという企画があるのを知り、この鎮守の杜について学びを深めるために参加をすることにしました。

当日は、高橋さんより、東日本大震災の時のお話を聴くことができました。このお話しで印象に残ったことは二つあります。一つ目は、東日本大震災に対して復興予算がついて、防潮堤を造ったことで、水産物ができなくなったことです。このお話を聴いて私は、災害から街を守る際に防潮堤を造ることは必要なことかもしれませんが、街の人と話し合いながら環境に配慮して復興をしていくことも重要なことだと思いました。二つ目は、神職同士のネットワークです。高橋さんは、仏教では宗派ごとのネットワークしかないが、神道は、宗派等がなく、神職同士の横のつながりがあり、それが防災拠点となったとお話しをしてくださり、日頃の神社界での各支部同士のつながりが震災の時に活かされることを実感しました。

その高橋さんからのお話しの後には、西野さんよりお話を聴くことができました。この西野さんからのお話しで印象に残ったことも二つあります。一つ目は、鎮守の杜は四層がそろっており、この鎮守の杜のところまで津波がおわったことです。このお話を聴いて、四層がそろうまでには、時間を要する為、木材を確保する為にスギやヒノキといった成長の早い木を植えた結果、災害に弱い土地になっていることを考えると、経済のことだけを考えずに、自然の事も考えるべきだと思いました。二つ目は、鹿の食害です。このお話を聴いた時に私は、このような現象を生んだのも人間自身なのではないかと思いました。その理由は、人間は様々な動物を絶滅させてきて、その結果として、鹿の食害が起こったのだと思ったからです。

午後には、実際に外に出て学ぶことができました。そこでも、様々な学びをすることができました。その中でも特に印象に残ったことは二つあります。一つ目は、針葉樹は土にかえるのが遅いということです。今までは、落ち葉は遅い、早いとかはなく、同じタイミングで土にかえると思っていたので驚きました。二つ目は、イチヨウの木は火事に強いということです。この話を聴いて、今までは木は火事には弱いと思っていたので驚きました。

このような学外研修での学びを通じて、小学校時代の校歌にあった「鎮守の森の濃みどり」という歌詞には深い意味があるように感じられました。今後は、神職として必要な知識として、鎮守の杜について深く学び、将来神職として奉職した際には、今回学んだことを活かしながら、この鎮守の杜の良さについて様々な人達に教えられるように努力をしていきたいと思っています。

¹ 世田谷区立世田谷小学校校歌（作詞大木惇夫、作曲平井康三郎）

馬上菜々香（神道文化学部 2 年）

参加した動機

K-SMAPY II で告知があり、授業内容や研究を考える際のテーマの候補になりそうだと思うので参加した。鎮守の杜への理解度が浅いことも踏まえ先生がいらっしゃること、専門家の方も来ることから正しい情報を得られるだろうとも思ったため。

何を見聞きしたか

千葉県君津市の施設にて先生方からの体験談や取り組まれている活動についてのお話を聞き、実際手がけた場所がどう変化しているかなどをスライドショーにてわかりやすく説明していただいた。また、「きみつのさんぽ道」に自生している植物の観察と解説をしていただいた。特に関東圏における鎮守の杜の構成種となる木や季節の木々、経済林から混合林、そして極相林に至るまでのプロセスを経過している瞬間の状態まで細やかに片端から話す話は普段接している木々が神社境内にどれだけ植わっているのかが理解できた。スダジイとクスノキの外見違いの判別を個別に西野先生に聞いたところ楽しそうに、葉の裏側が金色のものがスダジイと教えてくださった。また、宮脇先生の密植の手法、苗木屋の育成方法の類似点と、苗木の植え替えを体験し小さいながら根を張る植物の生命力を引き抜くことで面白くも最適な知識を得ることが出来た。10年経てばゴミを分解し頑丈な土壌を形成していたミニ鎮守の森は想像以上に大規模でなければならないといった感覚をなくし、植物が育つ時間も十年スパンで十分な対策を築けるならば防災対策として有効であると強調していた説に深く納得することが出来た。また、諏訪神社の境内で起きた台風による杉の倒木による被害を語っていただき風土に合う樹木と被害状況を詳しく聞くことが出来た。現場の声が最も力を持つ。高橋さんの東日本大震災の支援、ご実家の被害状況と避難者のリアルを語っていただいたのも当時をあまり記憶していない身としては非常に貴重な時間だった。

何を学んだか

自分たちでごく僅かな範囲からも鎮守の杜を形成することが出来ることを学んだ。本来の鎮守の杜は広大で、イメージとしては明治神宮のように木々が生き茂り様々な種類でなければ神社の杜、ひいては減災、防災の役目を果たせないと考えていた。しかし1メートル四方の範囲でも極相林の状態を作り出せば頑丈で、多様性の保たれた森が完成するならば都心の小さな公園でも、庭でも作り出せる。東日本大震災の被害範囲の境目に神社が創建されている理由はそこが高台にある奥山に位置する境目だからと言うこともあるだろうが、一要因として神社の鎮守の杜が減災をし、結果、物や人を助けている事実を知り衝撃を受け同時に非常に注目すべき事実への知見が広められた。また、裏山の森のような極相林に近い森、自然林は30%レベルしかなく、経済林が多く存在している日本を本当に森に覆われ、豊か

な国であると述べて良いか疑問が生じた。経済林によって多様性が奪われ、動物の被害が人里へ及ぶ、植物が育たなくなり地滑りや土砂崩れが起きる。自然災害ではなく、人災と認識すべきと、また神社の森の環境が多様性を肯定しこれから求められる生き方を最初から提示しているとお二方はおっしゃっており、現代社会の問題点を解決する良い切っ掛けや打開策も一つヒントがあるのではないかと思わされた。

この経験をどう活かしていくかについては、まず今後のゼミなどへの研究テーマの候補にしようと強く考えている。私の興味が現代社会の神社に求められるものと人々の習慣や参拝などの行動はどんな欲求（心）からあるのかであり、神社で思い浮かぶ最たる要素として杜は重要であると認識していた。都心の神社であってもその場所だけは木々があり、憩いの場所となっている。神社の特性、社殿がない古代祭祀の時にこそ、そのカミたる力や根源を発揮していたのだと思うと非常に興味深い。人は生き物の中でも長生きをする部類に入ってきているが、それでも100年がせいぜいである。千年という時を経ても、姿形を変えて循環したりオブジェとして存在している木々の有り様をふと感じる様になり講習を受けてよかったと思う点である。サステイナブル、多様性、共存を目標にしている現代社会の手本であり、絶対になくなってはならない必需要素、特に日本人は森の中で暮らしていた時間が長い本能的に森との関係性が強いという研究結果もある。これから生き抜くとき、南海トラフや地球環境の変動に揺れ動くからこそもう一度見直すきっかけとしたい。

研修そのものへの質問、疑問

実際の神社に行くこと以外で自分たちで取り組める神社の森への支援は何か、実践的な内容を詰め込んでいただけたら嬉しいです。社家でなくてもボランティア活動やその他何か出来る事はあるのだろうかと思いました。

須長皓（神道文化学部1年）

動機

私が生まれ育ち、そして今も暮らしているのは、街から離れた、緑が豊かなところである。家の近くの沢では毎年蛍が飛んだり、小さい頃から畑仕事などの農業を体験したりなど、自然と触れ合う経験は多かった。しかし、東京の大学に通い始め、都会に出てみると、自然に触れる機会は減ってしまった。畑や田んぼ、森などは見当たらず、なんだか寂しい気持ちになった。

そんな都会の中でも、國學院大学の近くにある神社にはたくさんの木々があった。他の神社でも豊かな緑を見ることが多く、神社と自然が強く結び付きはとても深いものであることを実感した。

そこで「鎮守の杜」を学ぶことができる研修があることを知った。私はこの研修の参加募集を見たとき、「鎮守の杜」がどういったものか知らなかったが、この研修で神社と自然の関わりを学べることができると思い、この研修に参加した。

研修の内容

今回の研修では、まず、千葉県君津市にある、「きみつのさんぽ道」に行った。そこは山を登ったところにある、自然の豊かなところであった。紅葉しかけている木々と、東京湾の向こうの高いビル群を見ることができる、景色のきれいなところであった。

そこで始めに、高橋知明氏の話聞いた。

高橋氏は大学卒業後、神社本庁に勤めていた。その際に東日本大震災が起こった。実家の神社も避難所になり、毎日ボランティアで被災した地域を周り、挨拶をしたり、欲しいものを聞いて届けたりもしたそうだ。そこでは神職同士のネットワークから、助け合うことが容易であったそうだ。神職同士の助け合いから神社の持つ防災ネットの力を実感したと語っていた。

また、津波の被害があったところを地図にまとめると、被害の淵に神社があった。そしてそれらの神社には「鎮守の杜」があった。そこで高橋氏は神社が持っている「鎮守の杜」が津波の被害を減らしたのではないかと気付き、それを増やすことが災害の多い日本を守ることになると考え、「鎮守の杜」を増やすという目的ができたそうだ。

次に、林学博士の西野文貴氏の話聞いた。まず、鎮守の杜が持つ防災の役割についての話があった。今の日本における森林は人工のものが六割を占めているという。自然が防災の力を十分に発揮するには自然にできた森林である必要があり、自然にできた森林とほぼ同じ鎮守の杜を作ることが、被災を和らげることになると話していた。

また、明治神宮の森は本多静六氏の計画により作られた人工の森であるが、100年前に150年後のことを考えて計画されたものである。今になれば自然にできたような森林が完成しかけているとし、自然な森林を作ることのお手本であると話していた。

その後、「きみつのさんぽ道」で西野氏による木々の説明を受けながら、散策をした。そして、スタジイの植樹体験をした。植樹の際の注意点や、良い土やポットなどを学ぶことができた。

その後、神社を訪ね、神主さんの話を聞いた。そこは地域を守るような神社であり、周りには豊かな自然に包まれていた。その神社も台風による倒木の被害を受けたそうだが、地域の人々や保険の力もあり、今ではしっかり建て直されていた。

感想

私は今回の研修を体験して、実際に触れ合うことで学べるからこそ、大切な学びであることを実感できた。自然を増やすにはただ木や草を植えるだけではいけないと知り、最終的な結果を真似するのではなく、過去を研究し、どのようにして成り立っているのかを知ることが必要であると強く思った。

また、幼稚園や小学生のときには植物を植える経験をよくしていたが、最近は、自然を眺めることはたくさんあっても、自然と触れ合う経験が減っていることに気づいた。久しぶりに植物を見ながら山の中をのんびりと散歩をしたり、スタジイを植えたりしたことでリフ

レッシュした気がする。たまには童心に帰り、落ちていた木の実を拾ったり、葉っぱをちぎって匂いを嗅いだりするのは楽しかった。植樹体験で学んだポイントは忘れずに覚えておき、家で植物を植える際に活かしたい。

自然が人々にとって大切なものであり、守り、増やしていかなければならないことはほとんどの人が知っているだろう。しかし、実際に自然を増やす活動をしている人はどのくらいいるのだろうか。植えたとしても、鎮守の杜のような良い森を作れているのだろうか。高橋氏や西野氏のように、災害の多い日本を守ることができる「鎮守の杜」を増やしていこうという活動が広がってほしいと思った。そして、現代の私たちが作った「鎮守の杜」が、未来の日本に降りかかる災害から守ってくれることを期待している。

山本智也（神道文化学部 1 年）

参加の動機

まず、私は神道文化学部の所属であるが、社家では無く一般家庭の出である。そんな私は大学に入るまで、神社というものは、なんとは無しにそこにいるであろう「カミ」に、家族が、部活で、勉強が、恋愛がだのなんだの一方的に願望を望むだけ望んで帰る。というアクションの場所、というのが私の神社のイメージであった。そんな私は、殊に現代の神社の意義は全くと言っていい程にわからなかった。地域コミュニティが崩壊し、科学で物事の事象が粗方説明出来る現代に、神社はどのように寄与し、生存していけるのだろうか。今回はそれを体験出来る極めて良い機会だと思い、勇んで参加をさせて頂いた。

この研修で何を見聞きしたか、そこから何を学んだか

まず千葉の君津市に着いてから、瀬田玉川神社の高橋知明さん、また林学博士であり、直階を取得されている西野文貴さんのお二人から、座学でお話を伺った。東日本大地震に於いての社家のコミュニティのお話から、地域コミュニティが崩壊していく現代の中で、地域コミュニティの存続の一助となるものであり、また、現状日本には原生林がとても少なく、杉や檜などの自然災害に弱い経済林に包まれていると聞いた。また、神社仏閣にある鎮守の杜が、その動植物を育ててきた歴史を伝える機能と自然災害に極めて強い防災効果を発揮する機能があり、「鎮守の杜」をモデルとして森づくりの為の植樹活動を推進している活動である、新しい産業である「新林業」の存在を知った。このような形で現代の神道は、災害大国である日本の景観を守り、また自然を守ることによって社会に寄与し、生きていくのだろう。

また、座学の後に君津の散歩道を散策した。

イチヨウなどの植物や女郎蜘蛛に至るまで、雑学なようなものから、為になるような話まで様々な生命の話を伺った。道中で伺った、自衛隊基地やスキー場の周りは、森林じゃなくしたことでススキ畑になっており、数十年経てば森になる。というススキの話に、自分の地元である長野県山ノ内町の、スキー畑だかゴルフ場だかで開発された後に生えていた豊穡

のススキ畑に突っ込み、走り回って笑ったことを思い出した。とても貴重な経験だった。

まとめ

散歩後に、宮城県の塩竈神社の鎮守の杜に生えていたドングリの鉢替えをした。まだ青々しく若いドングリの苗を順々に鉢替えした後に、鉢替えから2年を経たドングリを見せてもらおうと、とても強く根を張っており、さらに10年を経たドングリは、まるで小さな森のように力強く育っていた。手で押してもびくともしない、とても立派な姿であった。研修後、私は1本だけドングリの苗を持ち帰り、育てることにした。研修で、改めて理解が深まった。神道に対して誠実に接し、学び、考え、私もあの青々しくも、逆境に押されても負けない、立派に上へと伸びるドングリの木のようになりたいと思う。

國學院大學神道文化学部 令和5年度学外研修
「鎮守の杜とこれからの共生社会に学ぶ」参加学生レポート集

編集・発行 國學院大學神道文化学部
〒150-8440 東京都渋谷区東 4-10-28

発行日 令和6年3月26日